慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮本又次著 フランス経済史学史
Sub Title	
Author	渡辺, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.1 (1962. 1) ,p.93(93)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620101-0093
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620101-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

で発見とか新しい仮説が一ばん重要視されているのと同様に、経済の実証分析においてファクト・ファインディングとか新しい仮説の樹立がもっと重視され、これにもっと真剣にとりくまれてよいと、かねがね考えてきた。……このような行き方は、統計数字をモデルにあてはめてプロジェクションを行うことに主たる関心をいだく最近の実証分析のタイプからみれば、たしかに異端であろう。あるいは、理論を応用するといったことが中心で、日本経済がたんにその素材として用いられているにすぎないように考えている人とは、研究態度がまさに正反対となっている。この意味で、本書を評価なさる場合には、幾何の重要なファクト・ファインディングが行われているかということを看過されないように、私は希望したい」と述べる。われわれも著者の意とするところにしたがって、たとえばこの本から、成長と循環の理論的図式を学ぼうとしたり、経済発展の運動法則をひきだそうとしたりして、本書に性急な評価を与えてはならない。氏のユニークな仮説の提示の仕方と説得力ある説明とは、いつも読者の関心を大いにそそるものであるが、むしろそうした仮説の根拠となっているところの、統計数字に対する著者のふかい読みにこそ、学ぶものを見いだすべきであろう。あるいは、理論的構成のコルセットにあまりにも締めつけられすぎている論理主義者にとっては、著者のゆたかな洞察力と警抜な着想とが、新鮮な刺戟となるべきであろう。

本書は戦前戦後の日本経済の高度成長とよばれるものの要因を解明した第一篇、戦後経済におけるいわば成長率循環の特質を追求した第二篇、高度成長における輸出ドライヴ説を論争を中心として展開した第三篇の三部から成る。それぞれの篇はいちおう独立しているが、著者がいだいている日本経済へのヴィジョン――貿易と二重構造――といったものが、一貫して脈打っているのである。

高度成長を実現した要因はなんであるか。従来成長力論争でもとりあげられた主な要因はもっぱら必要成長率の要素としての貯蓄率と資本係数とであり、必要成長率を実現にいたらしめるところの、有効需要成長率の要因はあまりとり上げられていない。これは有効需要がきわめておう盛であるとの現実認識を前提したからで、同じ資本主義経済の長期理論でも、戦前における長期沈滞論と戦後の経済成長論とでは、総需要と総供給と、力点のおきどころがまったく位置を変えた観がある。

著者はこれに対し、戦前からの高い日本の成長率を、高い輸出成長率という要素に焦点を当てて解明する。高い輸出成長率が国内成長率をひき上げ、国内市場を拡大する効果が非常に大きかった、つまりある意味では古典派的な成長のプロセスが強調される。それなら、高い輸出成長率を可能にしたものはなんであったか。著者はこれに「交易条件の長期的不利化」の仮説をもって応え、さらに後者を説明する要因として、二重構造の分析を企てる。

二重構造の分析は、「資本集中」の仮説によって代表される。つまり、低賃金を基盤として輸出産業を発展させながら、この輸出の高度成長の結果を、いわゆるビッグ・プッシュの形で国内資本の高蓄積に充てたというものである。

著者のこうした「マル経的」発想をそれのみとりだしてみるなら、この発想が本書で十分論理的に展開されているとはいいがたい。しかし、この発想を支えるいくつかのファクト・ファインディングに関するかぎりは、まさに著者自ら発見し開拓したものである。われわれは本書において、たとえば国際間工業生

産指数の作成とか、在庫投資の推計とか、融資・在庫循環の二重性とかいう、統計的吟味にこそ、ふかく学ぶことが必要なのである。

（創文社・三六年六月刊・A5・三九八頁・九〇〇円）　―大熊一郎―

*　*　*

宮本又次著

『フランス経済史学史』

経済史の研究は世界的に重要な地位を占めるようになった。フランスでも研究体制を整え、予期以上の成果を挙げつつある。誰によって、どんな研究が出されたか。そこにはフランスなりの方法があるわけだが、特徴は何か。本書はこうした問題に答えることを直接の動機としている。経済史をどう進めていくか。そのための有益な指針が本書から得られるに違いない。

しかし著者がこういった形で著書をまとめた動機はそれだけにとどまらない。かなり積極的なものがあった。序にみる如く、それは外国経済史研究の方法そのものに関連した。わが国にいて外国の事象の史的研究に従う場合、史料の直接参看は不可能である。外国の学者が示した研究を判読し、それを手がかりに理解しなおすほかない。著者はこれこそが外国経済史研究の効果的な方法という。そういった視点に立てば、外国諸学者の発言はわれわれにとり生の素材であり、素材に対する深い理解を得るためにもそれがフランス学界でどれほどの位置を占めるかといったことへの反省が外国経済史研究で第一の階梯となろう。いわば史料批判にでもあたろうか。本書で著者はそれを果した。経済史の研究が精緻化するなかで史学史的考察の必要はますます高まっていく。本書の刊行は時宜を得たものといえよう。

著者は昭和廿九年から一年間滞仏した。本書の第二部はその間の見聞を基礎に、大阪大学経済学部の機関誌『経済学』に連載されたものの集成である。これによって最近の動向を知ることができよう。本書の第一部はかつて著者が『歴史と経済社会』（昭和廿三年刊）の一部として発表したものの転載で、若干補筆されており、黎明期から戦前にかけての事情を扱う。著者の指摘によるまでもなく、フランスで経済史は長く片隅に捨てられて来た。ルヴァッスール、シミアン、オーゼ、セー、ブロックが現われ、注目すべき業績を残している。しかし散発的な努力に終り、研究の一つの方向を打出すまでにいたらなかった。経済史がその地位を獲得したのは第二次大戦以降といっていい。起源はかなり古い。しかし成長の過程で後れをとってしまった。これは経済史研究に対決するフランス人の精神にかかわる問題であろうが、本書では立入った言及がない。もっとも知りたかった点だけに残念であった。（ミネルヴァ書房・昭和三六年十月刊・A5・本文三六四頁ほかに索引・一一〇〇円）　―渡辺國廣―

*　*　*

越村信三郎著

『マルクス主義計量経済学』

経済学に数学を使用すること、それは数量をあつかう科学、すくなくとも量的側面をもつ科学である経済学にとって当然のことであるように思われる。量的な関係を通常の言葉でのべることには限界がある。ごく簡単なことがらから一歩前進しようとするとき、数学は必須の用具となる。数学は量的な科学にとって、日常の言葉なのである。

マルクス経済学においても、多くの偏見が